

師走を迎えた。年の瀬は年の初めと同じく様々な願い事をよくするが、去年も一昨年も願いは同じだ。一日も早くコロナが終息してほしいということ。そして、今年は残念なことに、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が一日も早く終わることが、願いに加わった。

人は「幸せになりたい」と願うが、そもそも幸せには「なる」ものだろうか。学校の先生に「なる」や学級成績で一番に「なる」のは分かる。目標としてまたは到達地点として、いずれも何かがそこにはある。では幸せの到達地点って、一体全体どこなんだろう。

私が幸せを感じるのは、おいしい物を食べているときや気の合う友達とたわいもない話して盛り上がっているときだ。決してそれらは目標などではない。「ああ、幸せやなあ」と知らぬ間に口から出るのは、今その時が幸せな心持ちで「いる」からだろう。だから、「なる」ではなく「いる」あるいは「ある」が、幸せという言葉とは親和性が強いと思う。とすると、遠くどこかにある幸せに「なる」よりも日々幸せで「ある」ためには、やはり日々を大切に過ごしていくことが何より大切だろうと、改めて思う。

皆が幸せを感じられる社会を実現するためには、互いの違いを認め合うことが必須だが、言うは易く行うは難しだ。自分の思いばかりを優先し、相手の立場や考えを思いやる心が必要ならば、そのような社会は到底訪れることがないのは誰にでも分かる。にもかかわらず、互いの違いを認め合えないのは、何故なんだろう。

2学期終業式の式辞では、そんなことにも触れてみたい。いつもは3分程度の式辞が、残念ながら今回は少し時間が長くなる。皆さんにとって、式辞を聞く時間が不幸せな時にならないようにと月の初めから考えている。そうやって皆さんへのメッセージを考える時間が、私にとっては幸せなひとときだ。互いに良い年を迎えましょう。